



説教要旨「異邦人の救い主」

マタイによる福音書 2 章 13～23 節

イエス様がお生まれになった時代のユダヤの王、ヘロデは自分の王位を守るのに必死でした。神に頼らず、自分の力で立とうとした彼は、自分が王であり続けるために疑心暗鬼になり、自分の妻や子供たちさえ処刑したと伝えられています。彼は、自分とは別の「ユダヤの王」が生まれたことを聞くと、それを神の御心として受け入れるのではなく、むしろその神の御心によって生まれた救い主を抹殺しようとするのです。ヘロデ王の殺意は、夢のお告げによって父ヨセフに告げられ、この家族はエジプトに逃げだして難を逃れました。しかし、ベツレヘムにはわが子を奪われた母たちの嘆きが響き渡ります。ベツレヘムに住む二歳以下の男児が一人残らず殺された、とマタイ福音書は伝えています。

このヘロデ王による幼児虐殺がそうであるように、神の支配を受け入れようとせず、あくまでも自分を中心に据えようとする人の罪が引き起こすこの世界の悲惨な現実があります。しかし神は、この人間の罪が生み出すそのような悲惨な世界のただ中に、独り子であるイエス様を送り込まれました。私たちの救いを実現するために、それがどうしても必要だったからです。

ユダヤ人は、本当の王であるイエス様を、自分たちとは関係のないものとして、むしろ邪魔なものとして、拒絶し、追い払おうとし、最後には殺してしまいます。私たちはどうでしょうか。イエス様を王として、神の支配を受け入れることができているのでしょうか。…そうできないのがわたしたちの現実ではないのでしょうか。やっぱり自分が大事で、保身のために、イエス様を捨て、傷つけているのではないのでしょうか。そんな私たちの“罪”のために、イエス様は人としてこの地上に来られ、孤独に十字架へと歩まれ、死なれたのです。

「神なんて自分には必要ない」そうやって自分の力にばかり頼り、神の支配を受け入れることの無い私たちのところに、イエス様はそれでも来てくださいました。「そんなあなたであっても、神は愛しておられるのだ」と伝えるために。それがクリスマスの出来事なのです。